

コンテンツのトランスナショナルな制作と受容

——マンガを事例として——

花園大学

秦 美香子

1 目的

日本のマンガやアニメの「グローバル化」が言われて久しい。グローバル化を、文化の均質化あるいは既存の文化秩序への外来文化の取り込みといった一方通行の事象としてでなく、グローバル／ローカルの二元法が問い直されるような動的な過程としてとらえることの重要性は、すでに指摘されたとおりである(一例は、吉見 2003)。本報告では、とりわけ日本とフィンランドの2地域で制作・受容されるマンガなどのコンテンツの分析をとおして、「ローカルとローカルを新しい形で関連づける可能性をも抱えている」事象として「マンガのグローバル化」(ベルント 2010)を実証的に考察する。それによってマンガが、現在のポピュラー文化のトランスナショナルな状況を把握するひとつの有効な手段となる可能性について検討するのが、本報告の目的である。

2 方法

本報告では、高橋よしひろ作「銀牙」シリーズ、Tove Marika Jansson 作「ムーミン」シリーズ、Auni Elisabeth Nuolivaara 作『牧場の少女カトリ』、Julia Vuori 作「ぶた」シリーズを事例として取り上げる。「銀牙」は原作マンガおよびアニメ版が日本で制作され、現在では日本以上にフィンランドでの人気が高い作品である。「ムーミン」および『牧場の少女カトリ』はともにフィンランドで原作(児童文学またはコミック)がつけられ、アニメ版が日本で制作された。「ぶた」シリーズは原作コミックがフィンランドで制作され、翻訳版は日本語版のみ出版されている。またソフトバンクの携帯電話でしか視聴できない形であったものの、株式会社びえろによるアニメ版も制作されている。これら日本およびフィンランドで特徴的に受容されている例に注目し、この2地域で作品が制作され受容されるに至った経緯について確認する。そのうえで、ファンによって書かれたブログ記事、ウェブアンケート調査およびインタビュー調査の結果を分析する。

3 結果と考察

一例を挙げると「銀牙」シリーズは、現在も『週刊漫画ゴラク』誌上でマンガ連載が継続されていることから分かるように、日本でも一定程度以上認知されている。一方フィンランドでは、日本マンガのなかで最も人気の高い作品であり、1980年代にVHSビデオの形で輸入されて以来、現在に至るまで、とくに日本マンガのファンを自認する者以外にも広い年代に受容されている。ファンによるミュージカルも繰り返し公演されており、コスプレや同人誌、イラスト作品などのファン活動も盛んに行われている。

こうした受容状況は、フィンランドと日本に関して時に言われる「文化的近さ」を表す事例として語られる場合もある。本報告では、合理的根拠のないこの「親近感」をめぐる言説にも目をむけ、文化的距離をめぐるこのような感覚が、コンテンツの制作・受容にどう関わるのかについても考察を述べる。

文献

ベルント、ジャクリーヌ、2010、「グローバル化するマンガ——その種類と感性文化」大城房美・一木順・本浜秀彦編『マンガは越境する！』世界思想社、19-39。
吉見俊哉、2003、『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院。